



DRAMA かながわ No.91

Theater Association of Kanagawa March 2024

2023年度 合同公演「走れ！弥次喜多 ～かながわ・ぶらっどらいん～」
第21回かながわ演劇博覧会／令和5年度 神奈川県演劇フェスティバル／
資料室だより ほか



2023年度 神奈川県演劇連盟合同公演

『走れ！弥次喜多 ～かながわ・ぶらっどらいん～』

2024年3月1日～3日 神奈川県立青少年センター1階 紅葉坂ホール

【総評】 文：中山朋文 (theater 045 syndicate)

本年度は改修後初の紅葉坂ホールでの合同公演開催でした。2年振りのホールでの公演ということもあり、ニギヤカに楽しい芝居にすることを心掛けました。脚本担当の福本ぼう之介氏には、得意とする古典や落語の要素と現代的なシチュエーションをマッシュアップした作品を書き上げていただきました。

■多様な顔ぶれの役者たち、そして稽古

出演者の年齢は二十代から七十代まで様々。まさに老若男女、色とりどり。プロの演劇の現場で仕事をしている方もいれば、フルタイムで働きながら参加されている方もいる。ライフスタイルもそれぞれ違う。そのため稽古になかなか人が集まらない日が多く、今回一番苦心したのがここでした。少ない稽古時間の中でいかに有意義な稽古をするか。そのためには役者個人の予習が必要となってきます。

ブレ稽古ワークショップの段階から「稽古場はプレゼンテーションの場」とであると出演者には伝えてきました。私は役者の仕事とは「台本を読解し、どのように効果的かつ魅力的に演じられるかプランを立てて稽古に臨む」と考えています。役者が持ち込んだプランが面白ければ即採用し、さらに演出を加えることによってブラッシュアップすることができる。つまりその役者はより「オイシク」なことができるのです。逆に無策で稽古場に来た場合、演技指導に時間を割くことになり、演出をつける時間が少なくなることになります。

私が提示する「主体性」に戸惑う役者もいましたが、「自信をもって、元気に、安全に」をモットーに、稽古が進むにつれ恐れずにチャレンジしていく様はじつに頼もしく感じました。

■いよいよ小屋入り

上演時間が予定よりオーバーしたまま劇場入りとなったため、テキレジ (text regie: 台詞の追加や削除) を重ねました。福本脚本の魅力である軽妙なセリフと荒唐無稽な物語を最大限に活かすため、シーンのカット、入れ替え、セリフの変更をしてリズムとスピード感を加えつつ上演時間を短くすることができました。

キャスト・スタッフ陣もこうした直前での変更に対応してくれました。

■プロのスタッフワーク

スタッフ陣は心強かった。音響・照明・演出部はいままでもお世話になってきたプロフェッショナルに依頼しました。

演出する上で、稽古場でできることと劇場に入らないとできな

いことがあります。幸い今回は劇場入りしてからの本番までの時間が通常よりも長かったため、稽古場で不足していた部分を補って余りあるスタッフワークにより、キャストの魅力を引き出すことができました。キャストにとっても、場当たりで照明・音響にここまで時間を使うということはあまり経験がなかったようで、照明の美しさ、音響の正確さ、演出部のスムーズな進行にいたく感銘を受けていました。

■和太鼓祭音のパフォーマンスで大団円！

今回の合同公演のハイライトの一つに、ラストの和太鼓演奏があります。TAKの大先輩である、山本忠利さん率いる「和太鼓祭音」にご出演いただき、心躍る演奏をしていただきました。紅葉坂ホールの盆機構を使い、景色を一転させて、役者と合わせて総勢50人の圧巻のパフォーマンスで大団円！お客様からも大喝采をいただきました。



和太鼓を指導する山本忠利氏(写真中央)

■みんなで作る合同公演

演劇というのは、役者だけのものでも演出家のものでもありません。キャスト、スタッフ、関係者がともに作り上げるものです。それぞれのセクションでそれぞれがよい芝居作りに全力を尽くす。そこにプロだとかアマだとかは関係なく、関わっている全員がイーブンであり、立場の上下はありません。経験や技術の差はあれど演劇への情熱に差はありません。こんな多様な顔ぶれの現場は他にない。せっかくこの街で演劇をやるんだから、みんなとどこまで楽しもうじゃないか、という思いを持って全員で駆け抜けた公演でした。

楽しい現場からは楽しい作品が生まれるのが演劇の常。今回の合同公演は、参加者、お客様ともに楽しんでいただけた公演になったことと思います。



参加者の声

2023年度神奈川県演劇連盟合同公演にご来場いただき、ありがとうございました！

振り返ってみると初めてのことばかりの舞台でした。一つの舞台で二役いただくことも、上演時間が2時間以上であることも、衣装が着物であることも初めてでした。このスペースには書ききれないほどの新しい体験に溢れていて、とても楽しく充実した時間を過ごしました。わからないことばかりで稽古開始当初は不安でしたが、着物の扱い方から演技方まで、頼もしい仲間の大きな背中からたくさんのことを学ばせていただきました。そんな素敵な方々と舞台をつくれたことを本当に嬉しく思います。

どんな舞台でも終わってしまうと寂しさを感じますが、今回はとくにその寂しさを強く感じました。年齢も所属も経験もバラバラで、この舞台が終わると次いつお会いできるかわからないことが大きな理由だったと思います。しかし、どんなに違いがあっても「演劇が好き」という気持ちは共通しています。この気持ちを

なくさずもってれば、またどこかで会えると信じて、これからも精進して参ります。

この座組の一員になれて幸せでした。素敵な出会いと楽しい時間をありがとうございました。

文：守倉紡（初天神の息子／お蝶役）



劇評

2023年度 神奈川県演劇連盟合同公演

『走れ！弥次喜多 ～かながわ・ぶらっどらいん～』

初日公演を観劇。上演時間は約2時間。弥次喜多と十返舎一九との友情を軸にした娯楽活劇を堪能する。

紅葉坂ホールは開館60周年を機に1年以上の工事を経て昨年にリニューアルオープンしたばかり。そして神奈川県演劇連盟も創立60年を超える神奈川県内で活動する地域団体や個人会員によって構成されている。

神奈川県演劇連盟合同公演は、加盟団体の垣根を超えて神奈川県で活動する演劇人が集まり毎年開催されている事業である。新型コロナウイルス蔓延の影響で開催が断念された年もあったが、今年は紅葉坂ホール改修後初の合同公演ということもあり、公演関係者の思いはひとしお、祭りの趣である。

脚本は福本ぶう之介（プラスチックな月）がつとめ、十返舎一九の「東海道中膝栗毛」に古今東西の物語をミックスし、現代社会の諸問題にも切り込んだ、カオスな物語が描かれていた。ざっとわかったものを紹介すると、「八百屋お七」や、落語の「お血脈」「抜け雀」、小説からは「走れメロス」、また歴史的人物たちの逸話から一休禅師と地獄太夫、清水の次郎長一家とお蝶、薦屋重三郎と十返舎一九などだ。キャッチコピーには「なんだよコレ・・・まるで地獄じゃねえか！」とある。

俳優陣は、年齢も演技スタイルも異なる二十代から七十代のプロアマ混合の総勢25人が集まった。

演出の中山朋文（theater 045 syndicate）は、このカオス的状

況を豊かさにとらえ、楽しさを前面に押し出した作品にまとめ上げていた。舞台美術は舞台中央に大階段が構え、四枚の衝立と小道具をうまく活用した設え。照明、音響、映像と贅沢なスタッフワークで、スピード感のある飽きさせない演出が施されていた。

またフィナーレでは、紅葉坂ホールの盆機構（回舞台）も活用し、和太鼓集団の祭音が登場。大音量の太鼓の操演の中、華やかに終幕。カーテンコールはあたたかな拍手に包まれ、出演者には笑みがあふれていた。

出自の異なる演劇人が多く参加することで、諸々の調整は難しいものがあったと思う。初舞台に近い人も居たに違いない。稽古場から多くのキャストとスタッフが関係し、一つの作品を立ち上げていく。劇場に入れば、大きな舞台での仕込みと舞台稽古、そして本番。それらの過程は、普段の時間感覚とは異なるものであったことだろう。

初日ということもあり、ちょっとしたミスも見受けられたが、必死に乗り越えていく姿には、微笑ましくも感動できるものがあった。

神奈川県立青少年センターとの共催で行う合同公演は、歴史ある紅葉坂ホールの舞台に立つことのできる貴重な機会だ。今後も神奈川県内で活動する多くの演劇人のために開かれた場であってほしいと願う。

文：岡島哲也（ヨルノハテの劇場）



第21回かながわ演劇博覧会

【総評】文：穂村一彦（劇団「無題」）

開催日 2024年3月8日(金)・9日(土)・10日(日)
会場 神奈川県立青少年センター2階 スタジオHIKARI



第21回かながわ演劇博覧会（以下「演博」）にご来場いただき誠にありがとうございました。3日間12団体による計24公演が行われ、おかげさまで大盛況となりました。

4年前、世界中を突然襲ったコロナ禍。演劇界も大きなダメージを受けることとなりました。第17回演博は開催中止とし、先の見えない状況に戦々恐々とする毎日。それでも演劇の灯を決して絶やさぬようにとの想いで試行錯誤を重ね、そして今回「事前予約なし」「途中入退場可」「公演後の役者たちによるお客様の送迎」という形で演博を開催できたことは、大きな進歩だと考えます。

演劇とは劇団だけでできるものではなく、お客様との双方向コ

ミュニケーションによって、初めて生まれるものです。それもまた演劇の醍醐味の一つでしょう。交流スペースで公演後、役者さんたちとお客さまたちが笑顔で語り合っている姿を見て、とても嬉しくなりました。数年前までは当たり前だった光景がいかに大切に貴重なものだったかを思い知らされました。演博の狙いの一つに「公演団体と観客、双方から演劇の敷居を下げて、演劇の輪を広げたい」というものがあります。その一助になれたのではないかと思います。

今回、募集团体最大12枠のところに、19団体というとても多くの申し込みをいただきました。抽選によりどうしても落選を出さなければならないことは、とても心苦しかったです。しかし申し込み数が増えるのは演博の認知度が上がっているようで嬉しくも感じました。

例年のことですが今回もまたバラエティ豊かな公演が行われました。各団体が自分達の「色」をいかに発揮したとても面白いイベントとなりました。きっとお客様にも楽しんでいただけたと信じております。

こうして演博を作り上げることができたのは、ご来場いただいたお客様、演博舞台スタッフの皆様、青少年センターの職員の皆様、そして参加劇団の皆様のご協力のおかげです。この場を借りて心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

劇評 第21回かながわ演劇博覧会

■おおぐま座『百万年ピクニック』

横浜市の中学校演劇部出身メンバーで立ち上げたおおぐま座。キャラクターボックスの作品「百万年ピクニック」を好演。通常60分の作品を50分で上演する為、駆け足で演じられるのですが、しっかりとセリフ1つ1つ届いてきたのは稽古量の賜物でしょう。お芝居が、この作品が、大好きなんだとひしひしと舞台上から伝わってきました。2019年結成という事でコロナ禍による公演中止も経験してきたようですが、今後の更なる飛躍を期待したい素敵な公演でした。

文：福本ぷう之介（プラスチックな月）



■劇団「無題」『へる or へぶん？』

開演前の前説から絶好調でした。主宰であり、脚本家であり、演出家である穂村一彦氏。彼が口を開けば客席は笑いに包まれ、早くも客席と一体化しています。客席が温まった所で開演。今回も無題が得意とするファンタジーコメディ。安定の面白さでした。ライトノベルのような甘酸っぱさやアニメのような可愛らしさにあふれた穂村節炸裂でした。脚本が全国各地から上演依頼があるのも納得の45分。来年度も本公演や再び演劇博覧会に登場すると思うのでまだ観たことの無い方は一度観覧して欲しいと思います。

文：福本ぷう之介（プラスチックな月）



■劇団Gummy Gums『H』

ミュージカル調のお芝居作りを目指しているとの事でしたが、ダンスと身体表現が凄い！コミカルなシーンも多かったのですが凄い技術で凄くふざけている（良い意味です）ので、全てのシーンで圧倒されました。劇中に手品が盛り込まれていたり、有名作品のオマージュがあったり見所盛り沢山。幸せ(happy)なら手(hand)を叩こうや、死と生まれ変わりや天国？(heaven)など、「H」というタイトルに納得。次回公演あるならもっとたっぷり観たいと思わせる素晴らしい公演でした。

文：福本ぷう之介（プラスチックな月）



■赤ねく隊『そこにバナナは必要ですか？』

結婚式の二時間前の式場受付で起こるドタバタコメディ。バナナとバナナマニアのバイトの学生を中心に、招かれざる来賓と式場の社員達の間巻き起こる上質なすれ違いコントのような作品でした。バナナと共に作品に関わってくるヒサカキという樹木について、落語のマクラのように前説で語られた事がキーになり事件が起きたり、バナナの品種名など知識欲というかマニア欲というかトリビア欲もくすぐってくる作品でした。こちらの劇団も旗揚げ公演との事で次回公演あるならば注目したいと思いました。

文：福本ぷう之介（プラスチックな月）



■PLAN N『イーハトーヴの雪』

東日本大震災後の遺体安置所を舞台にした一人芝居。ブルーシートと椅子、そして照明は使わず行燈の明かりのみ。ゆらゆらと揺れる行燈は死者の魂。そこに静かに語り続ける一人の男の30分。息をするのも躊躇うような静寂と空間。劇場の匂いをあえて無くしていたと感じた。後ろのギター演奏はスピーカーを通していたが、観客をもっと引き込むために、目に見え耳で聞こえるノイズを無くせば更に素晴らしい芝居になったと思う。他の場所での普通の公演がとても気になった上演でした。

文：木之枝棒太郎（Theater Company 夜明け）



■演劇企画ケモノの庭園『一人芝居 星の王子さま』

複数の役を1つ1つ丁寧に演じ切る大狼羊さんの一人芝居。細かい所にとことんこだわったことが十二分に伝わってくる舞台だった。転換・小道具・役を演じ分けるためのアイテムを代わる代わる運んでくる黒子の二人の動きや渡し方も含めて、美しく洗練された世界観と演出。有名で度々自分自身もやったことのある「星の王子さま」でしたが、今回の一人芝居だからこそ改めて気づくこの作品の解釈があった。わかりやすくよく伝わる声、動き、キャラクター、お見事でした。今後の活躍が楽しみな団体。

文：木之枝棒太郎（Theater Company 夜明け）



■虚空環幻想レーゲンハイト『天使の降り立ったこの町で』

長年演劇博覧会を見てきましたが、これほど戦う系統の舞台が観れるとは。冒頭のやさぐれた主人公の一人台詞の説得力から、すぐに王道少年漫画のような設定の世界観に入っていく。キャラクターの色分け・能力の振り分けも見事。親近感のわくおとぼけキャラだけど強いボスを倒したかと思えば、その後に出てくるかつての仲間、という胸熱な展開に両者に感情移入。もちろん殺陣のレベルも高く、50分とは思えない満腹感。舞台上で観る厨二病という謳い文句に偽りなし。これからも神奈川で戦い続けてほしい。

文：木之枝棒太郎（Theater Company 夜明け）



■J-Pat『控室』

ジャグリング×演劇。大道芸のパフォーマーが本番直前になっても連絡が取れず現れない。というトラブルが起きているステージの控え室。仕方なくイベントスタッフが代理に出演することになるのだが、その場で何故か技ができちゃう。流石はパフォーマー集団。会場の観客も巻き込んで盛り上がっていく展開と演出。音楽の力も操り、長年積上げられた技のオンパレード。劇中の拍子が止まらない。公演中の手拍子も自然に出てくる空気作りに、普段の路上での場数と経験を感じた。まさにお祭りのようなステージ。

文：木之枝棒太郎（Theater Company 夜明け）



■劇団Salon de 自由席『僕のあいを、私のあいを、』

素直な空気感が醸し出すいい味が魅力。観客として素直に感情を舞台と同期できた。感情を表現できないロボットみたいな女性と逆に豊かすぎるアンドロイドの出会いから生まれる、ほわっとした恋物語が温かい。力まず、さりとしてセンチメンタルな感情に染まらず、“愛すること”そして“愛しいと思う相手と共に時間を重ねること”の大切さを、今の世だからこそ考えてみたいテーマに据えて楽しめた。エンディングも、もしかして？と哀しさを予感させながら、ほわっと温かい着地でほっとさせてくれた。

文：吉浜直樹（劇団横濱にゅうくりあ）



■劇団かに座『劇団トマレ』

ある小さな劇団が解散記念の公演に向けて稽古を重ねている。団員僅か4名。新人もいるのに解散公演？ってなんだか身につまされる筋立て。

3月12日に創立74周年を迎えるかに座が、今回初出演という新人2人と彼らをサポートするベテランを組み合わせ、芝居人間にとっては共感満載の作品を見せてくれた。姿は見えないが、5人目の役者が実はとても重要な役割を担うという隠し味もあり、ベテランはもちろん新人2人もしっかり芝居心を感じさせて安心して楽しめた。秋の本公演が楽しみだ。

文：吉浜直樹（劇団横濱にゅうくりあ）



■ドリル饅頭『横浜国際レーシング場〜貫徹〜』

演劇を志す人間が重視すべきは、自分たちが楽しんでいるか？という自問自答。出演者がみな本当に楽しんでいるのだ。参加者は年齢も経験もかなりばらつきがあるように見えた。特に若い何人かには素に帰りそうになる瞬間もあった。それでも必死で舞台に立ち続けてくれた。そういう積み重ねがこれからに生きることだろう。アクションコントのようなノリとエンタテインメントで、歯切れよく展開する。その中に彼らが掲げるテーマとしての「家族」がしっかり感じ取れた。

文：吉浜直樹（劇団横濱にゅうくりあ）



■劇団年輪『The Theater ～メイ作劇場～』

今回は若手を中核に据えベテラン勢がサポートするという、7月本公演に向けた試演会的な位置づけか。コアとなる若手を核に物語が展開する。日常生活のある部分を切り取ることでリアルさの中に空想の世界を盛り込むという設定だったのだが、リアル世界の中のある部分を切り取ることで小さな演劇的テーマとして届けることはできたのではないだろうか。つまりシンプルにできる部分は、素材の持ち味をそのまま提供してもステキな一皿になる優れたレシピみたいな仕上がりになるということ？

文：吉浜直樹（劇団横濱にゅうくりあ）



令和5年度 神奈川県演劇フェスティバル 劇評

京浜協同劇団「獅子」

2023年11月18日～26日 スペース京浜



京浜協同劇団が三好十郎の作品をやる！と聞きつけて観劇に出かけた。三好十郎といえば、プロレタリアの劇作家として著名であり、戦後は、無頼派の作家としても、名を知られた人だ。民芸の「炎の人」を子供時代に観た記憶がある。

さて、この作品は太平洋戦争が終わる直前に書かれたものであり、戦意高揚の国策に忠実な人たちの有様を描いている。そして「家」を守ることが何よりも大切であり、娘はすべからず親の言うことに従って当たり前、という世界の中にあるのだ。今日にあって、親子はお友達関係、また親子の絆の弱さが浮き上がっている状況で、この芝居を眺めれば昔日の感がある。

それはともかく、気の弱そうな、しかしながら、人の良さそうな主人公の父親を演じた田中耕一氏の演技はなかなかのものであった。客から言わせれば、「もう少しはつきりせんかい!!」とのもどかしさを感じる中で、何かとひそかに戦っている姿がはつきりと見て取れるのである。その妻の篠崎旗江さんの芝居も明確であり、周囲の敵意を巻き込むことに成功している。

そしてまた、城谷護さんが舞台に出てきた時には、感動ものであった。自分も「ヨコハマ」の地域劇団として「ヨコハマ」をテーマにした芝居を40年間もやり続けているだけに、“この日、この地で、この人々と”をコンセプトに頑張る川崎の市民劇団の代表格ともいうべき京浜協同劇団には賛同することが多い。

客演の小川がこうさんの演技もさすがと思われた。若菜とき子さんもお元気でした。客演の若い人たちも、それなりに終戦後間もない時期の青春のありようをよく演じていたと思う。

無理矢理に思わぬ人に嫁入りさせられる「お雪」という女性が突然家を出て秘かに心を通い合わせた青年のもとに走っていく。このくだりが案外しっかりとしたドラマになっている。「一生に一度は自分のやりたいをやるのだ。それでいい。」と父親は娘の「お雪」の逃亡に祝福を寄せるかのように「獅子舞」を踊って見せ場を作る。

やりたくもない戦争に付き合わされて、いつも苦悶するのは罪のない市民、であるという思想が、この作品には裏打ちされている。家を捨て、親を捨て、ご近所のコミュニティまでもほどこいて「大好きな人」のもとに走る「お雪」の姿は、今どきの若者たちにも共感できるものがあっただろう。

それにしても、戦後の新しい日本の時代は、一体今どこへ向かおうとしているのだろうか、と考えざるを得ないお芝居ではあった。

文：泉谷渉（劇団横濱にゅうくりあ）

演劇プロデュース『螺旋階段』『小田原みなとものがたり～大漁めでたい編～』

2023年12月1日～3日 小田原三の丸ホール 小ホール

小田原三の丸ホールは今回初めて訪れたのだが、予想通りのクオリティ。K A A Tのスタジオと並んで県内屈指の演劇空間だ。ここをレギュラーの公演拠点として使える劇団は羨ましい限りである。空間に負けない芝居力を身につけるといえる点では、環境のいい小屋を使えるのは実利的なアドバンスと言えるだろう。

そんなステキな空間でのお芝居。小田原みなと町を舞台とする三部作の完結編である。港町の小さな商店街が舞台。上手に食堂とカラオケバー、下手に海鮮居酒屋を配し、舞台センターに小さな広場がある。広場の向こうには防波堤越しに小田原の海が望める。劇的な高まりよりも何気ない日常が垣間見える安定感のある佇まいだ。舞台上の天井高がたっぷりで、平均的な小劇場空間の倍以上あるだろうか。その結果、下手側の居酒屋の二階部分に設置された物干し場もリアルな高さで作られていて、それが芝居の随所で効果を発揮していた。日頃からセットにはあまりこだわらないシンプルな作りを目指しているわが劇団に比べて、とても贅沢な空間に感じられた。そして役者たちの演技も空間に負けない力感にあふれていた。

オープニングは漁師町に相応しくドン前部分一面に広げた網を手繰りながら、全員でエネルギーギッシュな漁師唄と振り付け。期待感を巧みに引き出してうまい入りだと思う。他所からの客演も数名いるのだが、全体としてのアンサンブルがいい。座組の確かさを感じた。特に台詞のやり取りにゆめがないのがいい。立ち位置の設計もしっかりしている。ミザンセーンを計算して、おそらく稽古段階から役者に徹底したのだろう。T A Kの中にこういう軸のしっかりした劇団がいることは、他の特に若い劇団にとっていい目標となるのではないかな。

ストーリーとしては、劇的な意外性やぶっ飛んだ展開はない。ある程度観客の期待通りに展開していく。でもこのお芝居はそれでいい。オーソドックス、想定通りの筋立ての中にほわっとした柔らかさとか温かさを感じさせてくれる。それが何より大事。

観光客として登場してくる助教授が主人公の一人娘のハートを射止めることでエンディングにつながり、そこで結婚式のド定番である花嫁の手紙につながるのだが、それは芝居が始まってからある程度のところで読めていた。ただ、一般的な花嫁のように自分の親に宛てただけでなく、全ての登場人物に宛てた手紙だったのがプラスα。ここは三部作の総集編にふさわしい、観客の心を揺さぶろうという脚本+演出の落とし込みだろう。筋書きが読めたって、それはいいではないか。結果として、気持ちのいい感動があって、それによってもたらされるあたたかい涙があれば。実際、観客の半分以上はそれに乗っていたと思う。

文：吉浜直樹（劇団横濱にゅうくりあ）



劇団河童座「わしゃ、喰っちゃらん！」
2023年12月9日～10日 横須賀市立青少年会館3Fホール



横須賀の高校演劇部OBを中心に1951年に旗揚げした劇団河童座。初代座長は現座長の横田和弘氏の父が務めました。劇団名は、自由と創造をテーマに書かれた芥川龍之介の小説「河童」に由来します。これまで現代劇・古典・児童劇とジャンル横断の表現活動に取り組んでおり、郷土史や社会問題を扱う作品も数々手掛けている。そんな老舗劇団が創立70周年記念の演目を選んだ「わしゃ、喰っちゃらん！」は、劇団の代表作のひとつでもあります。

舞台の中央の暗い中、何か得体の知れない物体がスポットで怪しげに浮かび上がっている。舞台全体がブルーで夜を暗示。照明がつくと、その怪しげな物体は冷蔵庫であることが照明でわかりました。坂本正太郎が冷蔵庫を開けているシーンから始まったのです。

前説では「痴呆・ボケに真剣に取り組んだ、笑いあり、涙ありの上演時間90分予定のお芝居」とのこと。暗闇の台所でガサゴソと物音がする。泥棒かもしれない！と家族が棒やほうきを持ってくると、正太郎が魚肉ソーセージを加えて振り返る。おのずと期待が増すオープニングでした。

かつて高校の校長だった正太郎。齢70を過ぎ、最近は物忘れが激しく、どうやらアルツハイマー型認知症であることが発覚しました。正太郎の息子・強とその嫁・良子は、近所の目を気にして隠そうとする。ある日、孫である春子、夏子、秋男の三兄弟が正太郎の大切にしていたお皿を割ってしまうが、正太郎は笑って許す。しかし後日そのことを忘れて良子を責めてしまいます。また正太郎は自分が夕飯を食べたことを忘れ、ラーメンや寿司、うな重、ピザ等を大量にデリバリー注文してしまいます。

劇中、認知症のテストを家族全員でやっているシーンには驚きました。隠さずにみんなで笑いをまじえてやるところは河童座の芝居への取り組みの歴史を感じました。

介護の大変なところ、徘徊・食事をしたことを忘れるなど、厳しい負担が途中から家族となった嫁に集中しているという現実にもしっかり目を向けて、するどく家族を含めた社会全体に問題を提起している。最後の「正太郎の手紙」を読み上げるシーンは、会場からもすすり泣く声が聞こえてきました。

劇団河童座の座長だけでなく、横須賀の市民演劇を長年にわたって力強くけん引してきた横田氏。「何度も演じてきた河童座にとって宝物のような作品。生の舞台を味わってほしい」と語っていました。河童座の70周年記念公演の上演を心より喜び申し上げます。そして76回目を迎えた「三浦半島演劇祭」、令和5年度神奈川県演劇フェスティバルへの参加ができたことを仲間と共に感謝したいと思います。

文：村田次郎（劇団蒼い群）

劇団蒼い群「ダルマとタスキと白い手袋と」
2024年2月23日～24日 横須賀市立青少年会館3Fホール

2023年7月に逝去された別府寛隆氏の追悼公演。同氏がこの作品を書き下ろしたのは13年前とのことです。私は初めて観劇した為新鮮な気持ちで観ることができました。

大まかな粗筋としては、「ある市長選挙にて、若い市長候補とベテラン市長のタイマン！次第に白熱する選挙でお祭り騒ぎ！実は候補者同士は親子だった！？」といった、選挙を舞台にした複雑な縁を描いたドラマでした。前情報だけでは予想もしなかった展開に驚愕しました。

勿論主軸は政治でしたが、実は政治に興味の無い若輩者でしたので、ニュースで選挙が流れても毎度チャンネルを変えていました。そんな自分には不得手な内容では無いかと不安もありましたが、コメディ色が強く、劇の雰囲気に乗せられとても楽しい空間でした。

更に、劇中に政治関連の専門用語が度々出てきましたが、説明も踏まえていたので、政治初心者でも分かりやすく話に集中することができました。所々に時事ネタや現代における補足なども追加されていたのも見やすかったです。政治の話となると、観客の多くは今現在の政治の体制などを思い描き、それと照らし合わせて舞台を観る筈ですので、観ている側に寄り添った舞台作りには好感が持てました。

市長歴8年のベテラン市長候補と、若い新人の市長候補のタイマン勝負から、今と昔の政治や社会の変化が浮き彫りになっていく展開。そこには昔の近隣住民の助け合う社会情勢と現代の弱肉強食の社会を憂う姿が描かれて、昔のメリットと今のデメリットを主張した印象を感じました。

少し残念に思ったのは、BG（背景音楽）が役者のセリフを食ってしまって聞こえ辛くなってしまうシーンが時折あったことです。しかし、演者の表情や話の流れからセリフを予想することが出来たので、そこは演者さんの力量や脚本の構成が良かったからだと感じました。

一番印象に残ったのは最後のシーンです。舞台上にずっと飾ってあった元市長である市長の義父の遺影を、照明で抜いたシーンです。その時初めて別府寛隆氏の遺影が、市長の義父の遺影として飾られていた事に気づきました。役者全員がその写真を見送るように見つめながら、遺影だけを残して暗転していく。この劇がかつての仲間にも見て欲しい、見送ってあげたいという気持ちが伝わってきました。役者と関係者の全員が一つになって完成した舞台。その想いを痛いほど感じ取れました。

元市長と今の市長で街の雰囲気が変わったという言葉が作中にあり、今後は選挙にも興味を向けて、自分の街や国がどんな姿になるかを思い描きながら投票に臨んで見ようという気持ちになりました。

別府寛隆氏に感謝を送るとともに、あらためまして心からご冥福をお祈り致します。

文：鍋島樹（劇団河童座）



資料室だより

演劇資料室からオススメの一冊

「舞台監督読本 舞台はこうしてつくられる」
(舞台監督研究室 編・著／四海書房)

■舞台監督のはじまり (第1部一序文より引用)

初めに二人の人間がいました。一人は俳優と名乗り、一人は観客となりました。演劇の始まりです。

最初は自分の言葉を語っていた俳優でしたが、あるとき物語を語りたくなりました。劇作家の登場です。俳優が増え物語をわかりやすくする表現を考えるために演出家が生まれました。舞台に一本の柱を立てたくなり美術家を、俳優に何を着せるか考えるために衣装家を、物語に音楽を使うために音楽家を、踊りが欲しくなり振付家も呼びました。

物語に明るさと色合いを与えるための照明家、物語が伝わりやすくするように工夫する音響家が現れ、観客がどんどん増えていったので制作者も必要になってきました。こうして演劇にはたくさんの人が関わるようになりました。

さらに俳優が増えていくと物語も複雑になり、各プランナーがたくさんのアイデアを出すようになりました。演出家だけでは整理しきれなくなってきました。劇場も大きくなり働く人も増えたので、取り纏める人が必要になりました。ついに舞台監督の登場です。

■舞台監督とは

世の中に演劇が登場してから、おそらく一番最後に生まれた役割が舞台監督なのかもしれません。では舞台監督の仕事とは何なのか。

舞台に関わるあらゆるセクションの動きを把握・調整し、演出の意図に沿ったステージになるよう稽古から仕込み～本番～バラシまでを取り仕切り、責任を持って進行させる。一般的な表現をするならばこんな感じになるかもしれません。ここで一番重要なのは「事故が発生しないように務める」こと。安全なくしては成功なし。これもまた舞台監督の責務と言えましょう。

■舞台監督に向いている人

ゼネラリストな方が向いているでしょう。豊富な知識と多角的な視点、客観的な判断力、臨機応変な対応力。これらを有するのであれば間違いなく舞台監督に向いています。

しかし華やかな表舞台と違い、とても人の目に留まりにくい役割でもあります。舞台を観に来たお客様から「あの役者良かったね」「素晴らしい装置だった」「うまい演出するなあ」「音響や照明もレベルが高い！」と感想を頂くことはあっても、「舞台監督最高！」と言われることは皆無でしょう。しかしこれもまた賛辞。お客様が舞台上で得た感想すべてが、舞台監督に向けた感想と言えるのかもしれませんが。やはり「面白い舞台でした」と言われれば、舞台監督として嬉しいものです。

■最後に

劇団の見学に来る方は、ほぼ間違いなく役者志望です。音響や照明に興味もあるが、やはり舞台の上に立ちたいという思いで演劇を始める方が多いでしょう。私ももちろんそうでした。しかし不思議なもので、劇団に長く在籍していると裏方の業務にも興味が湧いてくるものです。後輩達の成長を舞台袖で見守る。そんな親心も出てきたりします。

舞台監督をやることになった方や、舞台監督に興味を持った方にオススメの一冊です。

文：オッスタかのり (劇団かに座)



誰も教えてくれなかった…
舞台芸術・裏の司令塔、舞台監督の世界
本質的な職能の考察から
活動の実態までを公開

目次

- 第1部 舞台監督の考察
- 第2部 舞台監督の実際

演劇資料室

【開室時間】

平日 (火曜～金曜) 13:00～22:00 (貸出は21:30まで)
土曜・日曜・祝日 (月曜以外) 10:00～22:00 (貸出は21:30まで)

【休室日】

月曜、年末年始

※上記以外にも休室日がございます。

ホームページをご確認の上、お越しください。

〒220-0044 神奈川県横浜市西区紅葉ヶ丘9-1

神奈川県立青少年センター2階 演劇資料室 電話：045-286-4485



神奈川県演劇連盟加盟団体 (50音順)

- 演劇プロデュース『螺旋階段』 ■ケル・ペッパー ■京浜協同劇団 ■劇団蒼い群 ■劇団河童座 ■劇団820製作所
- 劇団「無題」 ■劇団横濱にゅうくりあ ■Theater Company 夜明け ■theater 045 syndicate ■G/9-Project ■ドリル饅頭
- プラスチックな月 ■まりこ☆みゅーじあむ ■MPinK(ミュージカルプロジェクト in 神奈川)
- 横浜小劇場 (横浜演劇研究所附属) ■ヨルノハテの劇場

DRAMAかながわ 91号

【発行】神奈川県演劇連盟 (2024年3月31日)

【編集】オッスタかのり (劇団かに座)、吉浜直樹 (劇団横濱にゅうくりあ)、穂村一彦 (劇団「無題」)、
緑慎一郎 (演劇プロデュース『螺旋階段』)、野比隆彦、波田野淳紘 (劇団820製作所)、
中山朋文 (theater 045 syndicate)

【ホームページ】<http://kenenren.org/>

